文化事業「台湾の短歌を語る」実施報告

日本台湾交流協会台北事務所
副代表　服部　崇
秘書　洪　上婷
広報文化部主任　大内洸太

写真１　集合記念写真。多くの方々にご参加いただいた。

１．はじめに

当協会台北事務所では、日本文化の紹介を目的とした講座を不定期に開催している。令和７年度の第１弾として、文化事業「台湾の短歌を語る」を４月12日午後、当所文化ホールにて実施した（写真１）。千三百年以上の歴史を持つ日本の伝統詩歌「短歌」は、現代の台湾においても、台湾歌壇をはじめとする団体や個人によって親しまれている。今回の講座では、当所の服部崇副代表（以下、服部）が講師となり、「台湾の短歌の歴史と現在」と題し、台湾における短歌の受容と発展の歩みを時代ごとに分けて紹介・解説した。また、同時代の日本における短歌の受容のされ方についても紹介し、日台の短歌の歴史を比較しながら理解を深める内容とした。本事業の狙いは、日本の伝統文化である短歌について学ぶだけでなく、台湾での短歌の歴史を通じてその魅力により深く触れ、日台双方の文化的な共通点と相違点を知ることで、短歌への理解をより一層深めてもらうことにあった。さらに、講演に加え、会場内の展示スペースでは短歌パネル展示を実施した。短歌作品とともに、それに込められた思いやイメージを表現した写真も掲載し、視覚的にも短歌の世界観を感じ取れる構成とした。加えて、短歌には「花」をテーマとする作品も多いことから、展示にはいけばなも添え、空間演出にも工夫を凝らした。今回の講演は日本語のみ（中国語通訳なし）で行われたが、10代の若者から60代以上の年配の方まで、合計34名の参加があり、短歌への関心の高さがうかがえた。また、当日は、講演への参加者の34名以外にも会場のいけばな作品や短歌パネ

ルの展示を観覧しに来訪した方も見られた。

2．展示の紹介

当日は、文化ホールの展示スペースにおいて、参加者に短歌の多様な魅力に触れてもらえるよう、短歌に関するパネルや短歌集の実物の展示を行った。展示は次の三つのコーナーに分けて行った（写真２、３）。

展示（一）　古今和歌集

平安時代（905年頃）に編纂された日本の『古今和歌集』を取り上げ、日本の美しい自然風景の写真とともに、春夏秋冬を代表する古典の和歌を現代語訳付きで展示した。具体的には、春の歌＜世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし　在原業平＞、夏の歌＜蓮葉のにごりに染まぬ心もて何かは露を玉とあざむく　僧正遍照＞、秋の歌＜散らねどもかねてぞ惜しきもみぢ葉は今は限りの色とみつれば　読み人知らず＞、冬の歌＜山里は冬ぞ寂しさまさりける人目も草もかれぬと思へば　源宗于朝臣＞など合計八首の和歌の展示を行った。繊細な季節の移ろいが詠まれた和歌から、自然との調和を大切にする日本人の自然観が感じ取れるような演出を行った。このように、名歌を紹介することによって、歌のリズムや題材を理解しながら、初心者にとっても短歌を詠む際の手がかりになるように心がけた。

展示（二）　いけばなと短歌

写真２　いけばなと短歌のパネル展示

いけばなと短歌が作り出した自由奔放かつ感性豊かな世界を演出し、現代における短歌の表現方法を模索することを目的に展示を行った。今回の

写真３　いけばなが会場に彩りを添えた。

企画に携わった洪上婷は日本に留学していた頃から草月流のいけばなを学んでいる。服部は、2011年以降、短歌結社「心の花」に所属しながら短歌の実作を続けている。今回、洪上婷のいけばな作品に合わせて服部が作った短歌と、服部が作った短歌の意味を吟味して洪上婷が表現したいけばな作品をそれぞれポスターにデザインした合計14枚のパネルを展示した。いけばなは、花を花器に挿すことにとどまらず、心を映し出す表現手段とも考えられる一方で、短歌はその瞬間の感情や情景を言葉で紡ぎ出すものと言える。会場来訪者からは、いけばなと短歌のコラボレーションは斬新なアイデアで興味深いものであり、花と歌を同時に楽しめるのはとても良かったと、温かいご感想をいただいた。また、会場で実際に生けたいけばな作品から刺激を受け、自分らしい短歌を作ることができたと語った参加者もいた。

展示（三）　短歌集

この展示コーナーでは、台湾で短歌の創作活動を長年続けてこられ、今年で創設58周年を迎えた「台湾歌壇」より協力を得て、台北短歌会（「台湾歌壇」の前身）創設者の孤蓬万里（本名：呉建堂）の第一歌集『短歌集　ステトと共に』（1966年）や『花をこぼして』（1981年）、「台北歌壇」や「台湾歌壇」の初期から現在までの歌誌など、台湾の短歌発展の変遷を反映した短歌集30冊以

上を一堂に揃えた。台湾社会の変容とともに歌人たちが創作した短歌集は個性豊かで、台湾の風土に漂う情景や、愛する土地への思いが生き生きと短歌に現れている。こうした台湾の短歌が織り成す意味合いを味わいながら、短歌の魅力を再発見することができた方もいるだろうことを確信する。

3．講演内容の紹介

服部は、「台湾の短歌の歴史と現在」と題した講演を行った（写真４、５）。講演では、初めに「短歌とは何か」について所見を述べた。その後、「日本の短歌の歴史と現在」の概要を紹介したうえで、「台湾の短歌の歴史と現在」を概観した。講演に当たっては、台湾の日本文学研究者の方々や「台湾歌壇」の方々にもお越しいただき、講演に対する意見や補足コメントをいただいた。

（1）短歌とは何か

短歌とは基本は三十一音の定型詩であり、「詩」とは「心に感じたことをリズムに乗せる言語表現」であるとした。そして短歌の定型は五･七･五･七･七の五句であることに触れたうえで、定型からの逸脱、句切れ、句またがり、句割れ、字余り、字足らず、などについて紹介した。また、短歌の題材は自由かつ多様であること、季語は必要ないことなどを説明し、自然詠、職業詠、社会詠、相聞歌、挽歌などの分類が可能であると述べた。

写真４　服部による講演「台湾の短歌の歴史と現在」

（2）日本の短歌の歴史と現在

中世（『万葉集』、『古今和歌集』、西行『山家集』、『新古今和歌集』）、近世、明治時代、大正時代、昭和時代、平成時代、令和時代の和歌・短歌の変遷を概説した。講演では、明治時代以降の以下の短歌を紹介した。

東海の小島の磯の白砂に／われ泣きぬれて／蟹とたはむる

石川啄木『一握の砂』（1910年）

ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲

佐佐木信綱『新月』（1912年）

写真５　参加者の皆さんは興味津々に話を聞いてくださった。

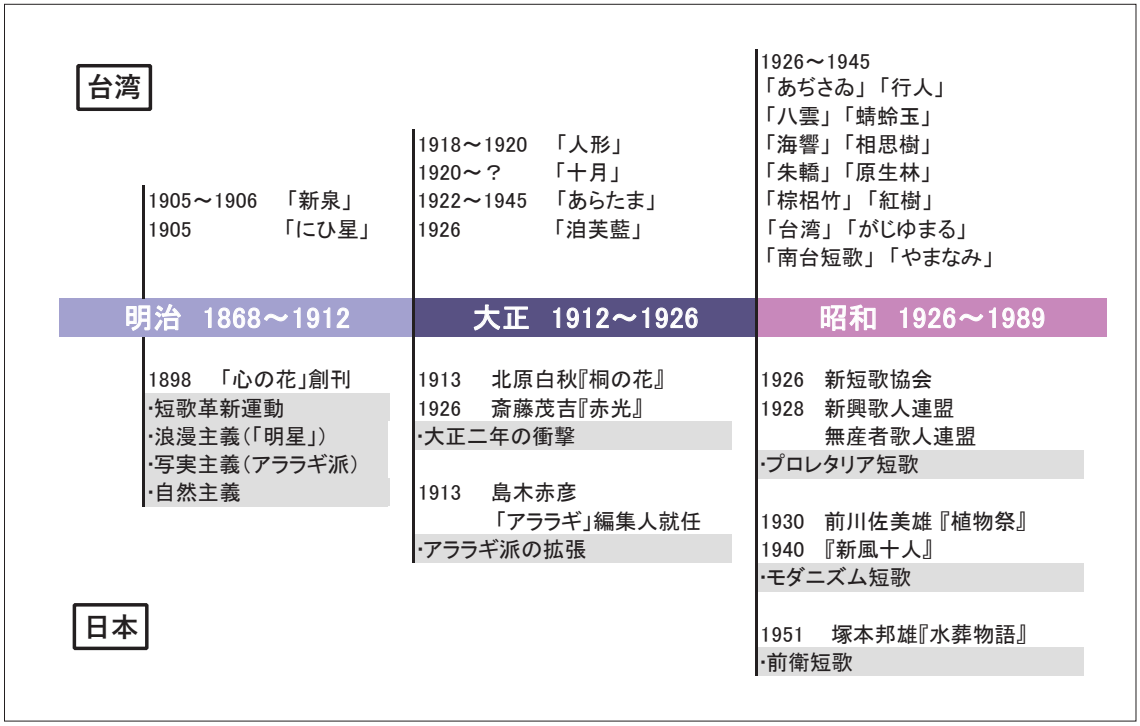


表１　日台短歌史年表

胸のうちいちど空にしてあの青き水仙の葉をつめこみてみたし

前川佐美雄『植物祭』（1930年）

革命歌作詞家に凭りかかられてすこしづつ液化してゆくピアノ

塚本邦雄『水葬物語』（1951年）

旗は紅き小林なして移れども帰りてをゆかな病むものの辺に

岡井隆『土地よ、痛みを負え』（1961年）

ジャージーの汗滲むボール横抱きに吾駆けぬけよ吾の男よ

佐佐木幸綱『群黎』（1970年）

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

俵万智『サラダ記念日』（1987年）

体温計くわえて窓に額つけ「ゆひら」とさわぐ雪のことかよ

穂村弘『シンジケート』（1990年）

廃村を告げる活字に桃の皮ふれればにじみゆくばかり　来て

東直子『春原さんのリコーダー』（1996年）

燃えたぎる鍋を見すえて　だいじょうぶ　これは永遠でないほうの火

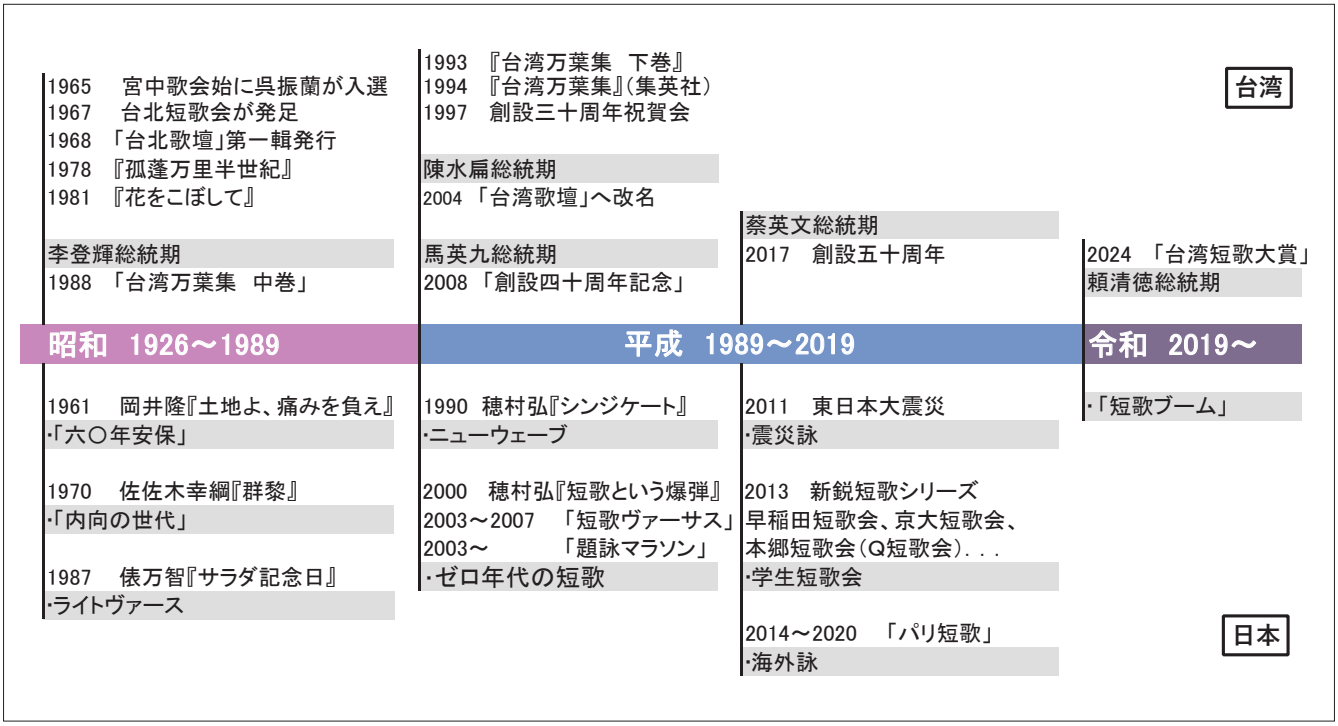
井上法子『永遠でないほうの火』（2016年）

講演は、服部のこれまでの読書や短歌実作の体験に基づくものではあったが、明治時代以降の短歌史の概説については最近読んだ高良真美『はじめての近現代短歌史』（草思社、2024年）の影響を強く受けていることに触れておきたい。同書はたいへん良くまとまっているので一読を勧めたい。同書との関連では、同書が「海外詠」に関する視点が薄いことが今回の講演との最も大きな違いであると考えている。

以上（１）、（２）を前提として、「台湾の短歌の歴史と現在」を概観した。

（３）台湾の短歌史（日本統治時代）

日本統治時代の台湾の短歌については、主に、頼衍宏「日本語時代の台湾短歌―結社を中心にした資料研究―」（東京大学大学院総合文化研究科・博士学位論文、2008年）を参考にした。同論文は、台湾の短歌結社や短歌誌を取り上げ、当時の日本の短歌結社との関連を明らかにしようとしている。明治時代に関しては、1905年から1906年にかけて発行された台湾の短歌誌「新泉」と日本の短歌結社「いかづち会」との関連、1905年に発行された台湾の短歌誌「にひ星」と日本の短歌結社「明星」との関連が取り扱われている。大正時代については、1918年から1920年にかけて発行



された台湾の短歌誌「人形」と日本の短歌結社の「創作」や「心の花」との関連、1922年から1945年にかけて発行された台湾の短歌誌「あらたま」と日本の短歌結社の「水甕」、「ポトナム」、「アララギ」との関連などが取り扱われている。昭和時代前期（1926年～1945年）の間には台湾において多数の短歌誌が発行されている。講演では、こうした点を紹介するとともに、日本統治時代については、日本から台湾に赴任・訪問した歌人たちが短歌を台湾に持ち込んだ側面（たとえば、下村宏・民政長官は「心の花」所属の歌人でもあった）、台湾の人たちが初等中等教育のなかで短歌に親しんだ側面（たとえば、李登輝・元総統の学生時代の短歌が残されている）などを指摘した（写真６）。

写真６　日本と台湾の短歌史の観点から解説をおこなった。

（４）1945年以降の台湾の短歌史

講演では1945年以降の台湾の短歌史についても概説を試みた。戒厳令期（1949年～1987年）については、特に前半の期間に関しては記録に接していないが、1965年の宮中歌会始に呉振蘭の短歌が入選したことを一つのエポック・メーキングな出来事として指摘した。日本統治時代に教育を受けた人たちを中心に短歌を詠み継いでいたことがうかがわれる。1967年には呉建堂らによる台北短歌会が発足している。李登輝総統期（1988年～2000年）には呉建堂「台湾万葉集　中巻」（1988年）、同「台湾万葉集　下巻」（1993年）の出版が台湾において行われているが、1994年には日本において『台湾万葉集』（序文・大岡信）（集英社）が発刊し、評判になった。洪淑靖『「台湾万葉集」初・再撰版の差異研究』（静宜大学日本語文学系碩士論文、2024年）は台湾版と日本版との差異を詳細に分析している。陳水扁総統期（2000年～2008年）には、「台北歌壇」から「台湾歌壇」へと改名がなされている（2004年）。2008年には蔡焜燦が「台湾歌壇」代表に就任している。馬英九総統期（2008年～2016年）には台湾歌壇は四十周年を迎えた。2008年には「台湾歌壇創設四十周年記念特集」が発行されている。2012年には鄭埌耀（元・台湾歌壇代表）が旭日

双光章を受章、2014年には蔡焜燦が旭日双光章を受章した。蔡英文総統期（2016年～2024年）においては、2017年、「台湾歌壇」は創設五十周年を迎えた。同年、台湾歌壇に対し外務大臣表彰の授与が行われた。2024年３月には日本台湾交流協会主催による「台湾短歌大賞」が挙行された。頼清徳総統期（2024年～現在）である現在、台湾歌壇は「台湾歌壇第四十集（呉建堂創刊第177輯）」（2025年２月）の発行など活動を継続している。講演では、「台湾歌壇」による活動以外にも、台湾の大学の日本語学科等の学生たちによる短歌に関する活動が見られることなどを指摘した。

（５）台湾の短歌の紹介

講演では、台湾の短歌として以下の三首を紹介した。

さ庭べを人に譲づるも吾子（あこ）が為め建て遺す家は孫も守（も）るらむ

洪長庚

洪長庚のノートより　1964年10月14日の日付あり

魚羣（なむら）追ふ鷗の羣が朝凪の海を變速しつつ飛びゆく

呉振蘭

宮中歌会始入選歌　1965年

万葉の流れこの地に留めむと生命（いのち）のかぎり短歌（うた）詠みゆかむ

孤蓬万里（呉建堂）

『台湾万葉集』（集英社）大岡信・序文より　1994年

一首目の洪長庚は洪上婷の曾祖父に当たる。今回の企画に当たって、洪家に残されていた遺品のノートの中から発掘した一首である。ノートには、日本語文法や短歌がびっしりと書き込まれていた。この一首の書かれているページには、1964年10月14日の日付が記されている。歌意は、「庭を人に譲ることとなったが我が子（洪上婷の祖父）のために建てて残す家は我が孫（洪上婷の父）も守ってくれることを期待している」ということになろうか。当時の時代背景がしのばれる。二首目は、1965年の宮中歌会始に入選した呉振蘭の一首である。魚の群れを追う鷗の群れが凪いでいる海を魚のスピードに合わせてスピードを変えながら飛んでいる様子が詠われている。よい歌だと思う。三首目は大岡信が『台湾万葉集』の序文で引いた呉建堂による一首である。万葉集から続く日本語の短歌を台湾の地で詠み継いでいく意志が力強く詠われている。この一首には日本の読者にも訴えるものがあると大岡信が感じたものと思われる。

（６）今後に向けて

今回の講演に当たり、日台短歌史年表（表１）を作成した。こうした年表を拡充してゆけば、台湾の短歌史が日本の短歌の動向の影響を受けていると同時に、台湾独自の展開をしてきていることがより明確となっていくことと思われる。このためには、さらなる資料の発掘や分析、また、短歌の実作の充実が必要になるものと思われる。参加いただいた台湾の日本文学研究者の方々や「台湾歌壇」の方々の講演に対する意見や補足コメントをここで逐一紹介することは控えることとしたい

写真７　多くの参加者が初めて短歌を詠んだ由だが、素晴らしい作品ばかりであった。

写真８　参加者が会場で詠んだ短歌を紹介・講評した。

が、日本統治時代の台湾における日本語の普及率に関する指摘、台湾の短歌に関する資料の発掘と維持の重要性に関する指摘、結社以外の歌人の研究の重要性に関する指摘があったことを記しておきたい。

4．おわりに

当協会台北事務所では、4月12日、文化事業「台湾の短歌を語る」を実施した。「台湾の短歌の歴史と現在」と題した講演をお聞きいただくことに加え、参加者の皆さんには短歌を一首作ってもらった。いけばな作品を含めた短歌に関する展示を踏まえ、題詠「花」（または自由）を提示した。花という言葉や具体的な花の名前を詠み込んだり、花をイメージしたりした短歌作品を即興で一首作ってもらった。参加者には短歌を作るのは初めてという方が多かったが、でき上がった短歌作品は個性的な作品が多くみられた（写真７、８）。今回の企画を通じ、台湾の方々に短歌の魅力を一層感じてもらいたいと考えている。今回の講演に当たり、日台短歌史年表を作成した。今後、短歌に関する各界におけるさらなる研究や実作を通じ、この年表が充実していくことを期待したい。